

最近の宮跡発掘調査

1 平城宮跡

奈良国立文化財研究所による、平城宮跡の調査は、現在、まず宮城の四至を明らかにすることを方針としておこなわれている。

宮城西南隅と宮城西面南門との調査につづいて、一九六四年二月から、南面中央の朱雀門をふくむ地域が調査された。朱雀門の規模は、桁行五間、奥行二間（約二五・三m×約一〇m）の建物であつて、東西に脇門をそなえている。朱雀門の内方は広場になつており、中央には道路があつたらしい。応天門は、想定していた位置では検出されなかつた。朱雀門付近で出土した軒瓦は、その九〇%までが、藤原宮跡出土品と同型式のものである。なお、朱雀門造営に先立って存在した溝から、過書の木簡が出土した。

息 宮城東面の北門をふくむ調査地域のうち、北門の東部、すなわち宮城外の遺構として、東一坊大路上で検出した、東西二基の井戸が重要である。両井戸はともに覆屋を

そなえ、東井戸は、なかの水を、中段から暗渠にぬく特殊な構造となつている。付近の溝から出土した木簡には、造酒司の名をはじめ、酒や酢に関するもの、酒米・赤米など米に関するものが多いので、両井戸は、造酒司に関連をもつと考えられている。北門自体は、後の削平によつてか存在を確認できなかったが、その南に、脇門とみられる小門と、二次的な築地塀の痕跡とを検出した。宮城内では、多数の建物をみだし、また、北門想定位置から西にのびる道路を検出した。宮城内の遺構でもつとも注目をひいたのは、内裏の外郭東面の築地塀の東に、南北につらなる、玉石積みの中東大溝である。東大溝は、東西から注ぐ排水溝・暗渠の水をあつめて南に流す、大規模な排水設備であつて、昭和はじめ、岸熊吉氏の調査した溝の南延長部分に相当する。この地域から出土した遺物は多種多数にのぼるが、とくに東大溝では、各種の遺物が層位的に検出され、木簡には天平から延暦におよぶものがある。

宮城東面中門をふくむ地域では、宮域外から、建物、溝、井戸のほか導水設備を検出している。遺物としては緑釉の埴、瓦の

出土をみた。これは、称徳天皇の神護景雲元年に完成した東院玉殿に、琉璃の瓦を葺いたとする続紀の記載と関連して興味ふかい。（佐原 真）（一九六五・五・五）

2 難波宮跡

〈第一八次調査〉

調査期間 昭和三十九年三月二六日～七月二八日

調査箇所

大阪市東区法円坂町 大阪郵政局配給課構内および都市計画道路築港～深江線北側歩道部分

約三三〇平方メートル

調査者

難波宮址顕彰会 山根徳太郎

第一六次・一七次調査において明らかにされた聖武朝内裏の正殿たる「大安殿」の前方八・九m（三〇天平尺）を隔てて、東西棟九間（二六・八五m）×二間（五・九六m）の「前殿」とも称すべき細殿風の建物址を発見した。またそれと重複して第一七次調査で明らかにされた天武朝「北方建物」と渡廊でつながれる、東西棟九間（三六・六m）×推定四間の「南方建物」を発見した。さらに各期の宮殿址と重複して、時期的には最も古く、しかも長柄豊碕宮から聖武朝難

波宮にいたる宮殿址とは方位を異にする建物址を検出した。

〈第一九次調査〉

調査期間 昭和三十九年七月二十九日～二月

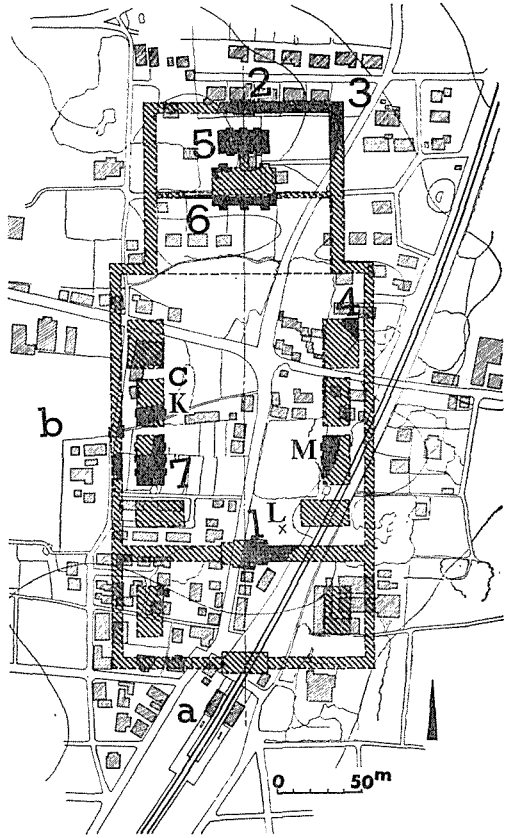
二七日

調査箇所 大阪市東区法円坂町 東保健所

西隣市有地約六〇〇平方メートル

調査者 難波宮址顕彰会 山根徳太郎

第一四次調査に際して発見された聖武朝



長岡宮朝堂院推定復原図(1965年)

1. 会昌門 (仮称) 1955年調査 K, L, M. 地区1965年調査
 2. 昭慶門 (仮称) 1959年調査
 3. 〃 回廊 〃
 4. 朝堂東第1堂 〃
 5. 小安殿 (仮称) 1961年調査
 6. 大極殿 〃
 7. 朝堂西第3堂 1964年調査
- (実線黒色の部分：調査済み 斜線部分：推定)
a: 阪急西向日町駅 b: 乙訓中学校 c: 向日町保育園

3 長岡宮跡(一九六五年度)

内裏西外郭築垣と宮址中心軸に関してほぼ対称の位置に東外郭築垣址を検出、また、それと重複して同じく聖武朝のものと思われる南北棟六間(七・二二m)×二間(五・七七m)の建物址を発見した。このほか長柄豊碕宮および天武朝難波宮に属する遺構やこれらの遺構に先行し、各期宮址とは方位を異にする遺構群を発見した。

(中尾芳治)

この調査は一九五五年会昌門跡の発掘調査にはじまり、断続的につづけられてきた長岡宮跡の発掘調査を継承し、京都府教育委員会の事業として長岡宮跡発掘調査団(調査主任、京都大学教授福山敏男)によって実施された、今回の発掘地点は京都府乙訓郡向日町字鶏冠井小字山畑にありK・L・Mの三地区に分れる。K地区は南に小路をへだてて昨年度調査した朝堂の西第三堂跡

に接し、北に向日町保育園、西に糸里制のなごりといわれる道路をただてて乙訓中学校がある。I地区は阪急電鉄西向日町駅より北へ約一〇〇メートル進んだ道路の東側にある畑地で第一回調査の会昌門跡の北東にあたる。M地区は阪急電鉄の西向日町駅より線路沿いに一五〇メートル北へ進んだ西側にある南北に細長い畑地で南西に民家や溝をへだててI地区に連なる。

〔K地区〕 この地区は昨年度調査した西第三堂跡に接し、西第二堂があるものと予想されていた。調査は前回の基準点から基準線をとって西南隅から発掘をはじめた。地表下約一五—二〇センチの黒褐色土層に瓦片が北東にむかってL字型にぎっしりとならび、その下部に巾五〇センチの小石敷がしきつめられ、内側には凝灰岩の地覆石の痕跡がみられた。これは前回調査の石敷に連なり、その位置から西第三堂と第二堂の中間に面した回廊(あるいは築地)に設けられた門跡と推定されたが、西と南を道路に限られ調査できず根石も一個しかみられなかった。この北には小石敷列と重閣文・重弧文・唐草文の瓦片が南北にならび門跡の北につづく回廊の東面と推定された。門跡

の東には経約一・五メートルの根石が東西に二個あらわれ、これから北東にかけて小石が一面に散乱し著しく擾乱されていたが、これらを清掃し東西と南北に直交したトレンチを設けたところ、南北トレンチの根石列に相当する位置に経一・五メートルのつき固めた黒褐色粘土質の掘り込みがあらわれた。この根石地業は小安殿や西第三堂にみた円形の壺掘の中に石と粘土を交互に何層にもつき固める方式とはやや異なり、これは地質と採用された技術の系統の相違を思わせた。この根石の掘込は西にも平行してあらわれ、西第三堂に関連する西第二堂の構成が明らかになった。なお東西トレンチの根石の掘込の下層に緑灰色の粘土質のやや不整な凹凸が約一・五メートルへだてて二個所にあらわれ、これを追求して発掘したところ、東へ向って傾いた二条の平行した不整形な線であることがわかり、またこれとならんで牛の蹄跡やなまぬにめりこんだ人の足跡も検出された。これらを総合して長岡宮大極殿造営の際の車の轍と判断した。これは雨期に行なわれた造営工事の作業路の上に茶褐色の砂質の土を埋めこみ、その上に西第二堂を構築したことをももの

たるもので、当時の宮殿造営工事の状況がしのばれて興味深い。なおこの轍の巾は約一・四メートル、唐長安大明宮北門跡の石敷上の車輪の巾と一致することも注目されよう。

〔I地区〕 第一回調査の会昌門跡の北東にあり、基準点をJ地区より移動して調査を進めた。地表下約五〇センチに粗い石敷面が大きく凹みをなしてあらわれ、さらにその下層にも黄褐色土層に接して細かいしきつめた小石敷があらわれ、さらにこの地山の黄褐色土層を求めてトレンチを設け掘り進めたところ、段状をなして深く掘りこまれ粗い石敷面の約六〇センチと一メートル下から動物の骨片、その下から重閣文などの瓦片、さらに約二メートル下から大きな凝灰岩片などが出土した。この掘り込みは長岡宮期の井戸跡とも考えられるが、その性格は不明である。調査当初ここに東西方向の東第四堂を想定したがその痕跡はまったくなかった。この地区の東に接し阪急電鉄の線路に面する住宅を建設した際、基礎工事でM地区と同様の根石群をみたとの情報を与えた。これによれば東第四堂は予想よりも東に位置していたのかもしれないがそ

の検出は西第四堂の調査にまたなくてはならない。

〔M地区〕この地区には西第三堂に対応する東第三堂が位置するものと予想されていた。地表約五〇センチ下より西面に六個の根石、その東に四個の根石を検出し、またその西に凝灰岩の地覆石やその痕跡とさらにその外側の小石敷から階段跡を検出することもできた。また北に設けたトレンチから北面の中央の根石も検出できた。この北面の根石列の北には雨落の小石敷があり、建物の北面と北西隅を確認することができた。この建物跡は東面を阪急電鉄の路線・南西を畑地で削りとられ、その構成の全貌を明らかにすることはできなかったが、前回調査の西第三堂と対応させて復原すると、東と西の第三堂の中心軸線の距離は一一六・四メートルをはかる。

以上が今回の調査の概要であるが、今年は一九五五年に第一回の発掘調査が会昌門跡ではじめられてからちょうど十年になるので既調査の概括を行なうとともに今後の調査計画ならびに保存計画に関する調査団の構想も提示した。なお附图はこれまでの

調査の成果により長岡宮朝堂院を推定復原したものである。
(西川幸治)

4 鳥羽離宮跡

地名 京都市伏見区中島御所ノ内町前山町

期間 昭和四〇年一月二五日より三月一日まで

調査者 京都市文化財保護課 堤圭三郎担

当

昨年度調査した池汀が、更に南から西南方にのびる事を確認。また、やはり昨年発見した桁行八間、梁行三間、周囲に縁をめぐらした檜皮葺の建物に、その西南隅の廊らしき建物が接続する事が判明した。さらに、この遺構の東に苑道があり、庭石が布置してある事も知られた。

白河上皇の仙洞として応徳三年に造営された鳥羽離宮は南殿に当り、東北より西南に、証金剛院(御堂)、小寝殿(釣殿付属)、寝殿、西対代、中門廊がならび、それらをつなぐ渡殿類や付属の廊や雑舎があった。今回調査の遺構は、証金剛院もしくは小寝殿のいづれかである。寝殿でない事は、『兵範記』仁平二年(一一五二)三月六日の条にある寝殿の指図と異なるのでたしかである。

(堤圭三郎)

委員会だより

◇お約束通りに、五号をお届けいたします。本号にて、刊行のおくれは大分にとりかえました。あと一息で、「奇数月一日発行」にたち戻れると思います。

◇刊行をがんばりますと、今度は財政の方は火の車です。会費不足のある方は、よろしくお願いいたします。

◇前号に、製本所の手違にて、一部落丁本がありました。監督不行届の点、深くおわびいたします。お手持の「史林」四八巻四号、五〇頁台をお調べ下さい(四九一六四頁が脱落しているものがあります)。万一落丁がありましたら、お取替いたしますから、ご返送下さい(ご返送の送料はもちろん当方にて負担いたします)。

一九六五年八月二五日印刷 定価三〇〇円
一九六五年九月一日発行

史 林 (第四八巻第五号)

発行所 史 学 研 究 会

京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内

理事長 田 村 実 造

印刷所 中村印刷株式会社

京都市下京区西七条御所ノ内町五〇